

# 北海道の幼児教育の現状

## 北海道と幼稚園

小林 幹 夫

『川は山へ行く』。これは北海道をひらいたアイヌのいったことである。川が、彼らを山の狩り場へと導く、もつとも太い道だったからである。それで北海道の地名には、この川に関する字のつくものが実に多い。旧土人たちには、川がどんなに大切であったか、本道のどんな小さな流れにも名がつけられたことでもよくわかるのである。

私はこれにならって見た。

『幼稚園は都市へ行く』、その道をゆけば、子どもを集めること

ができるからである。これはシャモ(和人)の知恵といえる。そして都市に幼稚園が集中することになる。まるで、幼稚園は子どものためのものではなく、都市のものであるような錯覚さえおきるこのごろである。

そうはいうものの、ジェット旅客機などで空から北海道を訪れてみると、この広大な土地のどこに幼稚園があると思うであろう。また海峡を渡り汽車で北上する。窓から原野を眺めても同じことである。

函館市は北海道の玄関口にあたる。ここはむかしから幼児教育では一番進んでいる。札幌市のあたりは、北海道でいえば居間といった所か。全道の幼稚園の約五分の一がここに集中している。人口は北海道人口の割の一都市である。居間の奥はまだまだ広がっている。「狩勝の国境を越えてからがほんとうの北海道がある。」とよくいわれる。あるジャーナリストは、その峠にたつて眺望し「なんともはや茫漠(ぼうぼく)たる風景であった。まるでつかまえどころがないのである。」と語っている。

北海道の幼児教育の展望も、それに似てつかまえどころがない。しかし、私はこう思う。幼稚園教育は幼児教育のすべてではない。しかしその大きな分野をうけもつのが現在の幼稚園であろう。

北海道の幼稚園の歩みは、開墾に似ている。農夫が汗みず流して土地をきりひらき、土地を肥やし作物をそだてる、まさにそうである。教育はカルチベートする(耕す)ことだといわれるから、当然

のことかも知れない。

## 二

札幌市のある地区は石狩支庁である。ここは本道十三ある支庁の一つとして、約三五五〇平方キロメートルの広さである。他の府県と比べると、そこだけでほぼ埼玉県とか奈良県にあたっていよう。

現在札幌市には四十六の幼稚園があるが、全部私立で、公立幼稚園は何もない。市をのぞいた石狩支庁の町村部は香川県や大阪府の面積に匹敵する。そこには現在わずか五園しかない。だからこれまで小学校の先生がたは、別の面から本当に奉仕的に、幼児教育のために力をつくしている。小学校に併置された幼児学級がそれで、この支庁にも七〇ももたれている。幸いに、十年前程前に、僻村にボツンと公立幼稚園が生れた。そして営営とし幼児教育の開墾を続けている。

札幌市内、定山溪の辺でさえ、近年でもときどき熊がでる。つい先日、千才から札幌へむかう途中の、広島村の田圃をオヤジ(熊)が徘徊したと騒いだばかりである。私立幼稚園四園のうちの一つが、その辺の鄙た所にある。そこもそうであるが、北海道を廻ると、よくもこんな辺鄙な所に、と感心するような幼稚園に行くわすことがある。「幼稚園は都市へ」とばかりゆかず、原野へも入っていることがわかる。だが放はまだまだ少ない。

絶対数の上では、北海道の幼稚園も就園している園児数も、全国

の府県の順では上位から八番目、九番目どころである。現在(本年五月)公私立あわせて二五三園を数えている。そのうち、本年四月から五月にかけて二十三園が私立幼稚園として認可され、増加した分が含まれている。公立幼稚園は現在十一園にすぎない。それも昨年、不況が原因で炭坑の閉山のあおりで十二園から一園が消えた。このように全幼稚園数のうち九十七%が私立幼稚園である。

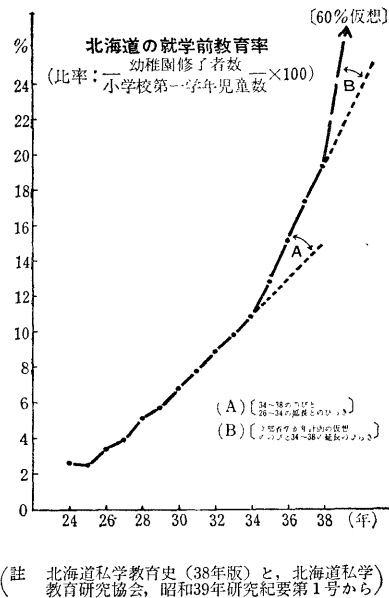
石狩支庁の例でもわかるように、都市部はまだしも、町村などの郡部は全く幼稚園が少ない。私の計算では、全道的にみて市部と郡部の幼児数全体はそうへだたりはない。しかるに、郡部の幼稚園に就園している幼児の数は、市全体の五分の一そこそこに満たない。市にあるものが全道の園数の七五%をしめている。

もし、今回の文部省の計画にそって町村に新設するとなるとどうなるか。現在の三園を、七か年に全支庁にわたって少なくとも百三十五園位増さねばならないのである。これは本道にとって実に容易なことではないのである。

北海道の幼稚園の普及率の低いのは、町、村といった郡部に普及していないのが大きな原因である。

## 三

小学校には三十八年度入学の児童のうち幼稚園修了者が約一万七千人いた。就園率は十九・四%で全国の平均三十六%にほど遠い。戦後十五年間の推移をグラフであらわしてみよう。



これを見ると、三十四年まで線型に進んだものを延長し点線でしめすと、実際とはA角のひらきがわかる。私立幼稚園が増し就園率が急上昇したのである。なぜそうなったのか原因とか要因を、関係者のどなたに尋ねてもわからない。いまだに不明のままである。これまた、茫漠たる北海道の地らしい現象の一つであろう。

更に、三十九年以後は七年後六十%を仮想して実点線をひき、三十八年までを、そのまま延長して示したのがB角である。この二角のひらきが似ているのも私には興味と期待をもたせる。

#### 四

真冬の降雪の中を傘をさして歩くと、本道の地方人は珍らしがって笑う。これは道産子の風俗にはないからである。真冬の雪はサラ

サラし連日の吹雪には傘など用をなさなくなる。

雪の少ない本州からはじめての転勤者の親によくあることだが、厳寒の多雪期に、戸外で遊び惚けている子どもをみると、魂消てしまう。誇張ではなく、本州の人たちのなかには北海道では冬期間、幼児を室内に閉じこめておくものだと思いついておられるかたも実際いるのである。北海道の幼稚園では、たとえ零下十何度の寒さが毎日続いても、幼児は平気で通ってくる。四、五才児ばかりではない。三才児にも、一冬をとおしてどころか、一年間皆勤の園児はざらにいる。

保育者の頭にある計画は、一年の半ばは冬と、そうでない季節に大まかにわけ、子どもの活動する世界を思い浮べてみているようだ。一番の懸念は寒さのきびしい長い冬にある。雪が消えると、次の冬までめまぐるしく、春・夏・秋とうつりかわる。

北海道の風土と季節感に根ざして、北海道の幼児教育をややおもむきをかえ、違った面から姿をとらえる必要があると思える。

私はそれを高緯度からの保育ということにしている。すでに動物学上では、北海道と本州との間に一線をひいたブラクストン線というのがある。「高緯度の保育」といっても、そんな特殊なものでもない。ごく並道に、北方のとか北国の保育といっつかまわないことである。たとえになるかどうか、もし仮りに心配性の人がいれば幼稚園というところ、いかにも幼稚ないかげんなことをやっている、とられる。そこで近代園(キンダイガルテン?)なる語をあみだした

とする。どちらの造語も前むきの姿勢をこめている点では似てゐる。高緯度保育の語には、さらに風土とか内容面への配慮を打ちだそうという地域性を感じるがどうであろう。手まえみそになるかも知れない。

## 五

最後に幼児教育の水準にふれてみよう。現象面だけだと本道のようなどころでは、ピンからキリまで、その間がひらきすぎ、どこに線をはひくか難かしい。現場の自主的な研修や研究の内容をみることも一つの目のつけどころになろう。

例えば、二、三年前に北海道私学教育協会の発足した。その会のきもいりで、幼稚園の先生がたは二つの共同研究と三つの指定研究をまとめた。いずれも、水準というよりは現場の底力の一面を示したものといえる。

北海道教育学会は昨年から共同の課題として、「本道の就学前教育の諸問題」をとりあげた。これまで弱かった幼児の家庭教育も含め本格的に取り組んでいる。無論、学者、研究者の他に現場の保育者が参加している。水準の向上に働きかけるものと期待は大きい。

現職の研修としては数年前から毎年、私立幼稚園連合会が自主的に本道としてはかなり大がかりな研修会をもっている。

昨年からは、教育委員会が主催して、幼稚園関係者の全道幼稚園研究集会がもたれるようになった。

グラフでも明瞭なように、いまや北海道の幼児教育は雪どけに入ったといつてよい。全体はきめのこまかいすすみかたとはいえない。ましてきれいなことはほど遠い。いつてみれば、フロンテアにはフロンテアにふさわしく、そこにはたくましい希望にささえられている。それは大地を堀りおこす開墾に似て、幼児教育の土壌から、子どもたちの上にみずみずしく及んでほしい明るい願いが込められているといいたい。

(北海道教育研究所)

## 保育所と北海道

大上真宏

### ○保育所の濫觴

北海道が松前と呼ばれていた頃、この土地は金儲け以外のなににもでない土地と人々は思っていたのです。その頃の北海道は住むに寒く、語るに友はなく、訪れる者は土着のアイヌ人たちばかりで遅れていたとはいえ、内地で多少の教養と文化生活を味わった者に